

## 須恵器窯跡

あゆむ 「今日は“古窯”だってね。フフフ。」  
 ミドリ 「と言っても、お泊りじゃないわよ。」  
 ふみお 「“古窯”で、“古窯”を見るんだ。」  
 あゆむ 「えっ、どういうこと？」  
 ミドリ 「“古窯”、つまり古い窯の跡が、“旅館の古窯”にあるんだって。」  
 あゆむ 「へえ、なんだかおもしろい話だね。」  
 文じい 「正確に言えば、“須恵器窯跡”じゃ。」  
 ミドリ 「“須恵器”というのはどんなものなの？」  
 ふみお 「土器なんだよね。」  
 文じい 「ふむ。まあ、見ながら話をしよう。」  
 ミドリ 「フロントにきれいな方がいらっしゃるわ。よろしくお願ひします。」  
 あゆむ 「どっちだ？ お土産がたくさんある。」  
 ミドリ 「あまりきよろきよろしないの。その奥ですって。ほら、看板がいろいろあるわ。」  
 ふみお 「えーと、『古窯の由来 1300年前の窯跡』、『山形県指定文化財 奈良朝の窯跡』、『古窯銘の由来 昭和32年 増築の折に

発掘された 奈良朝より平安朝にかけて約300年間焼かれた窯跡による。』、それから、『楽焼画廊』というのもある。」

ミドリ 「由来というのは？」  
 ふみお 「“現在のようになったわけ”というような意味だよな。」  
 ミドリ 「すると少しわかってきたわ。つまり、1300年前の窯の跡が昭和32年に見つかって、それで、古窯となったのね。銘というのは名前のことでしょう。」  
 あゆむ 「なるほど。“昔の古い窯”で“古窯”か。うまいこと付けたね。“なりようあさ”というの何だ？」  
 ふみお 「それは“ならちょう”と読むんだよね。奈良時代のことでしょう。」  
 文じい 「ふむ。」  
 ミドリ 「じゃあ、“平安朝”というのは、平安時代？」  
 ふみお 「そうだね。奈良時代となると1300年前にもなるし、そのあとに続くのが平安時代。」



あゆむ 「ところで、皿がたくさんかざられているな。」  
 ミドリ 「そうね。『楽焼画廊』ということは…？」  
 文じい 「土を焼いて、皿を作り、それを展示した部屋じゃ。まあ、それは後にして、窯跡というのは左の方。」  
 あゆむ 「おお、穴ぐらみたいになっているぞ。」  
 ふみお 「すごいものだね！」

ミドリ 「その前に、神様がまつられてあるわ。

“<sup>かまじんじや</sup>窯神社”だって。」

あゆむ 「ケースの中に、皿のかけらみたいなものが入っている。」



ふみお 「あ、これが“須恵器”というものかな？」

文じい 「そう、その通りじゃ。」



ミドリ 「下に、やっぱり同じ由来が書いてあるわ。

そして、確かに“須恵器の破片”とある。」

ふみお 「土器と須恵器はどう違うの。」

文じい 「同じ土器なんじゃがな、これまでは、地面にまきなどの燃やす物をおいて、そこで土で作った壺や甕などの入れ物を焼く“野焼き”だった。その後、それが少しずつ進化して素焼きの土器が作られるようになる。それは、“土師器”と言われる。」

ふみお 「じゃ、須恵器は？」

文じい 「須恵器は、ここに見えるような窯をつくって、そこで焼いたものじゃ。」

ふみお 「なんか、<sup>せんもんてき</sup>専門的になった感じだね。今も、焼き物と言うと、窯で焼くしね。」

ミドリ 「何が違ってくるのかしら。」

文じい 「ふむ。窯を見ると上に向かっているだろう。“<sup>のぼり</sup>登り窯”と言われる。もとはこの倍近い奥行があったそうじゃ。このような窯では、温度が高くなって、<sup>かた</sup>堅くてしっかりした焼き物ができるといわけじゃ。大陸から伝わってきた<sup>ぎじゆつ</sup>技術だと言われている。」

ふみお 「なるほど。材料とか技術者などは…？」

文じい 「<sup>しゃめん</sup>斜面の場所に、<sup>ばしよ</sup>質のいい粘土、<sup>しつ</sup>まきなどの燃料、それに水があるところで、おそらく<sup>ねんりよう</sup>専門に焼く人たちがいたのだろうの。」

ミドリ 「ほかにはこういう跡はないの？」

文じい 「もちろんある。市内では、<sup>さんぜんがり</sup>三千刈、<sup>よつや</sup>四ツ谷、<sup>くぼて</sup>久保手などに跡が見られたそうじゃ。」

ミドリ 「どういうものを作っていたのかしら。」

文じい 「ここに飾られてあるように、“<sup>つぎ</sup>坏”というものや、“<sup>ふた</sup>蓋”、<sup>こうだい</sup>高台付坏などじゃな。そして、この発見を記念して、<sup>はっけん</sup>楽しみの焼き物としての“<sup>そつぎよう</sup>楽焼”を始めたのが創業の方じゃ。」

あゆむ 「おお、『<sup>けいじ</sup>花の慶次』だ！」

文じい 「ふむ。なつかしい有名な方たちのものばかりじゃな。それでは、泊ってゆっくり<sup>はいげん</sup>拝見し、<sup>はっけん</sup>楽焼もさせてもらおうかの。」



ミドリ 「やったー！」

